まちとつながり

Sun 05

茨城県
東茨城郡
茨城町

Summer 2018

Sun 05

茨城県
東茨城郡
茨城町

Summer 2018

Contents 目次

03　特集｜ゆだねる
人と寄り添う存在

07　まちを走る路線バス
-ゆだねたくなるもの-

09　まちで暮らす人
まちを想う人

15　祭ばやしが聞こえる
お祭りと絆 地域のつながり

17　連載　マチのケシキ

18　編集室から

Cover
写真／アラタケンジ　モデル／松浦陽菜
“風を切って 爽やかに里山を走る”
夏らしさを求めてサイクリング。
緩やかな坂を見つけ、颯爽と下る瞬間
里山の風と夏のにおいを感じました。

短夜(みじかよ)が暁け　青田にひっそりと漂う夏霞
力強い陽射しが地を照らし
炎天の奥　逃水と共に立ち上る雲の嶺
その隙間から　神鳴(かみなり)が顔を覗かせる

命　営みを激しく輝かせる時節
呼応するように響く　深山蝉(みやまぜみ)の鳴き声
それに魅せられるように
穏やかな野山が
喧騒と鮮やかさで染まっていく

Sunは
茨城町と　ゆるやかにつながる

いくつもの縁を
人々の暮らしや情景と共に
綴り　伝えていきます

撮影場所:秋葉地区

特集

ゆだねる

人と寄り添う存在

写真｜アラタケンジ　文｜米村優子　石川聖太

ゆるやかな流れ

やわらかい光　吹き抜ける風

目を瞑って　ふと自然に包まれる瞬間

大きなものに　身をゆだねていたくなる

ゆだねているから　感じることがある

ゆだねられているから　見えるものがある

ゆだねること　ゆだねられること

そこから　まちで暮らすことの本当の豊かさが

見えてくると思うのです

国内有数の乗馬クラブ

森の草木たちも目覚めたばかり、夏霞に包まれた厩舎。馬たちの元気な鳴き声が次々と聞こえ始めます。馬房の奥、本立の中を過ぎ視界が開けると、たくさんのサラブレッドたちに出会いました。放牧場の中を自由に駆け回っていたり、露に濡れた草を食べていたり、その様子はまるで、朝の自由時間〜。夏の強い陽射しが降り注ぐ前、まだ涼しいこの時間から、馬術苑の一日は始まります。

馬術苑 中島トニアシュタールは一九八三年に茨城町大戸地区にて開業しました。日本乗馬界の先駆者だった先代が手つかずの森を少しずつ切り開き、厩舎を建て馬場を整備し、スタッフと共に汗を流しながらこれまでに四ヘクタール以上の馬場を築き上げてきました。

現在では、逞しくしなやかな体躯に美しい毛並みを持ったサラブレッドやスポーツホースたちが集う乗馬クラブになりました。元気な馬たちと触れ合えるのはもちろんのこと、里山の四季を肌で感じながら乗馬を楽しむことができる。そんな自然との一体感を求めて、馬術や乗馬愛好家が関東一円からこの場所へ集まるのです。

阿吽の呼吸、人馬一体

「乗馬は、人と馬との信頼関係を築き上げることが大事なんです。人が意思疎通を図ろうとすることで、馬から乗り方を教わっていくんです。馬に対してどれだけ親身になれるか。馬の動きに人はどう対処するか。いわば人も馬も、互いに身をゆだね合える関係になれるというか。まさに阿吽の呼吸、〝人馬一体〟となることが必要なんです。」

そう語るのは、代表取締役の中島信行さん。先代の父の影響で、物心つく前から馬と触れ合うのが当たり前の生活でした。茨城町に移り住んでからというもの、学業の傍ら放課後になると牧場へ向かい、馬と共に過ごす日々を送っていました。

「この頃は父から託されたキーパーという仔馬をかわいがっていて。少しずつ馬との信頼関係が芽生え、馬術にも徐々に本腰を入れるようになりました。」

馬術の指導者を育てる立場であった父から手ほどきを受け、高校時代にインターハイの個人戦で優勝すると、大学時代は全日本学生馬術大会の団体戦で総合優勝。馬術で全国トップレベルの成績を収め、オリンピック選手を目指し欧州に留学したことも。

「大学時代は、馬との生活から競技に参加する一連の流れやこの道に進むために必要なことを学べた時期。今の自分は、ほぼこの頃につくられたと思います。」

現在は父の後を継ぎ、約五十頭の馬を育てる傍ら、乗馬や馬術の指導者として次世代を担う選手の育成に力を入れています。

環境を引き継ぎつなげていく

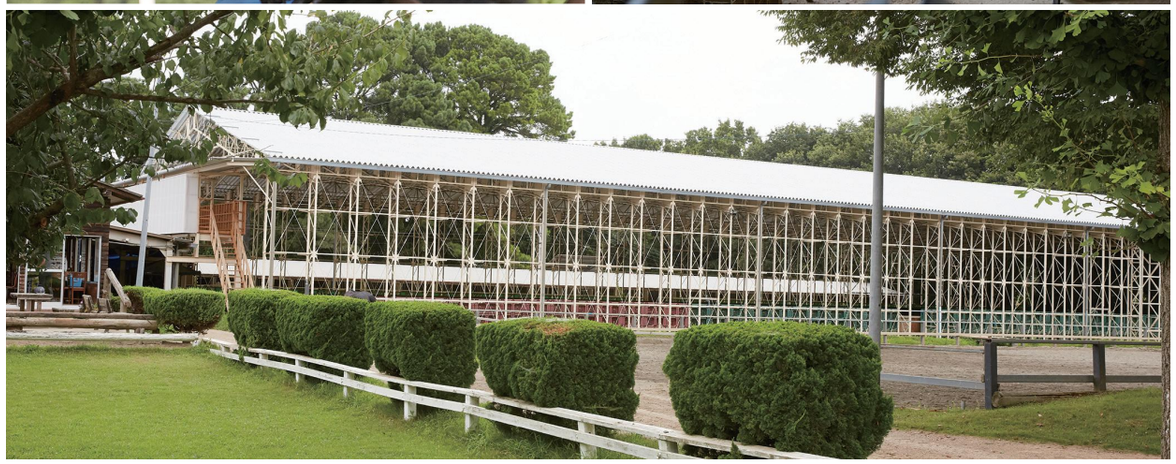
ドイツ語で〝発表する厩舎〟の意味を持つトニアシュタール。全国で約千カ所ある乗馬クラブの中でも、民間では数少ない競技馬術の国際大会が開ける設備を有し、会場の提供だけでなく、自ら競技大会も主催しています。

中島さんは茨城県馬術連盟の強化委員長や全国乗馬倶楽部振興協会の委員をはじめ、引退競走馬のリトレーニングにも貢献し、日本の競技馬術の発展に寄与しています。

また、かつて先代がしていたように子供たちにも馬術を教え、今年国体に出場する長男をはじめ、娘、甥っ子たちと共通の目標を持ち、日々練習に励んでいます。

「父が私にいろいろと残してくれて、その意思を引き継ぐ形で今日までこの乗馬クラブを続けてくることができました。これからは人や馬にとってさらに良い環境を築いてあげることで、子供たちへ引き継げるものにしたいです。また、将来的には中島トニアシュタールのオリジナル血統馬を育て、独自の調教の技術を広めることで、乗馬クラブとしての地位を高めていきたいと考えています」と、中島さんは語ります。

開業から三十五年を迎え、その歴史の中で少しずつ環境を整えることで、今では国内有数の乗馬クラブとなりました。人と馬との理想郷を思い描き実現してきた馬術苑の歩みは、これからも続いていくことでしょう。



馬術苑 中島トニアシュタール turnier-stall.com

まちを走る路線バス

～ゆだねたくなるもの～

写真：アラタケンジ　文：ホシカワリエコ

まちを走る路線バス
それには なにか独特の時間が
流れているような気がします。
つい身体をあずけたくなる
その秘密を伺いました。

まち唯一の交通インフラ

駅のない茨城町にとって、バスというのは重要な交通手段です。車社会なので大人になると利用する機会も少なくなりますが、学生の頃にお世話になったことがある人も多いのではないでしょうか。

バス停に立っていると、遠くにゆっくりと走るバスが見えてきます。目の前でプシューと扉が開き、整理券を手にステップを登り、定位置に座る。そんな懐かしい日常風景を記憶している人も多いはず。心地よい揺れと移り変わる景色。ゆっくりとした独特な時間の流れ。バスに身をゆだね目的地までの短い旅。ある時はウトウトと夢の中、ある時は音楽を聴きながら。そう広くはない空間でそれぞれが思い思いの時間を過ごす…。

町を走る関東鉄道の路線バスは、水戸駅から運転免許センターまでの路線、イオンタウン水戸南までの路線、水戸医療センターまでの路線、石岡駅までの路線、この他にグループ会社の運行する茨城空港、鉾田駅、小川駅までの路線などがあります。

お客さんを運ぶ運転手さんの日常

現在の水戸営業所の運転手さんは一〇六名。茨城町出身の方が多いとお聞きしました。

坪（わくつ）さんは茨城町に在住でこの道三十年のベテラン。観光バスの運転手の〝白い手袋〟に憧れて運転手になったそう。

運転手さんの日常は分刻みのスケジュール。出勤すると免許証を提示し、アルコールチェッカーを吹き異常がなければ車輌点検をします。そして運行ダイヤ表（運行計画）に従って一日の乗務にあたります。現在七十ほどのダイヤがあり、その走行距離は一日平均約一七〇キロメートルほど。昭和四十三年からワンマンバスとなったため、一人で一台のバスを運転するのはもちろん、アナウンスからお客さんの乗降時の安全確認、運賃の確認などを行います。

坪さんのモットーは「安全・快適・迅速」。お客さんにとってごくありふれた日でも、受験のように人生を左右する重要な日でも、坪さんにとっては一日一日が大事なのです。「ハンドルを持ったら気が抜けない。いつでも安全にお客さんを送り届けることが大切なんです」と言います。三十年の運転手生活で印象に残っていることは、とお聞きすると「日々いろいろありますが…〝ありがとう〟と感謝されることです。それがいちばん嬉しいです」と答えてくれました。

身をゆだねたくなる秘密

バスの仕様・装備は時代とともに変化しています。運賃の支払いは両替をしてジャラジャラと小箱に現金を入れるシステムに加え、今年の三月に全車ＩＣカードでの支払いが可能になりました。運賃の掲示も液晶に変わり見やすくなり、ステップも段差がなくなりました。ベビーカーで乗車のお客さんには、ベビーカーを固定するベルトも付いています。無線も導入され、緊急時の連絡や交通状況などの連絡も取れるようになり、安全面でのサポートもさらに充実しています。

時代が変わっても変わらないのは、車内に漂うあの独特な雰囲気と時間の流れ。バスに乗ると運転手さんがいて、座っているだけで目的地に近づける安心感からか、ついつい身をゆだねてしまいます。それは、安全・安心を第一に、毎日お客さんを送り届けている関東鉄道の皆さんの日々のたゆまぬ努力があるからに他なりません。

地域と路線バスの未来

利用者の減少で廃止された路線もあるそうですが、これからますます高齢化社会が進み、車の運転が難しくなるお年寄りの方も増え、バスのニーズは高まるのではないでしょうか。茨城町にとって路線バスは、昔も、今も、そしてこれからもなくてはならない存在です。バスを降りる時の「ありがとうございました」というあいさつに、運転手さんがやさしくおだやかな笑顔で対応する光景を引き続き目にすることができるよう、これからも私たちの地域や生活に密着し支え続けていただけたら、と思います。

関東鉄道株式会社は、明治時代に開業した竜ケ崎鉄道、常総鉄道、大正時代に開業した筑波鉄道、鹿島参宮鉄道の四社が合併してできた会社。
茨城県内最大であるのはもちろん、全国でも屈指の地方民鉄です。
関東鉄道　kantetsu.co.jp

まちで暮らす人 まちを想う人

写真 ― アラタケンジ　文 ― 米村優子

いつでも全力 真っ直ぐに

まちで暮らす人

独立行政法人国立病院機構
水戸医療センター つくし保育園 保育士　斉藤沙也佳

Straight on full force

一九八六年水戸市平須町生まれの斉藤さんは、茨城町宮ケ崎に転居と同時に茨城町立沼前小学校（現在は統廃合により青葉小学校）入学。自身の信念を貫き、念願の保育士に。現在は二人の子育ての傍ら、水戸医療センターつくし保育園に勤務。長男の入院や自身の経験から〝命を預かる場〟である幼稚園や保育園、保育士の在り方を模索中です。また、茨城町が運営する、いば3ふるさとサポーターズクラブの活動にも参加しています。

どんな環境でも、夢へ向かって

小さい頃は男の子とばかり遊んでいたと思います。森や田んぼで遊んだり、資材置き場で遊んだりと、割とやんちゃな子だったのかなと思います（笑）。同時に小学生からやっていたバスケットボールを通じて、女子同士の絆や友情も感じていました。中学時代は正直、先生方に手を焼かせる方だったと思いますが、どこか冷静に自分を見ているところもありました。

幼い頃から幼稚園の先生になりたいと思っていて、将来の道をはっきりと決めたのがこの頃。夢を叶えるには〝やることはやろう〟と心に決めていたので、授業中にふざけていても、その分自宅で勉強をしていました。中学三年の時の担任の先生が私のそういう部分に気づき、自分を信じてくれていたんです。その先生がいたから、落ちこぼれにはならなかったんだと思います。

祖父が勧める高校があったのですが、反発して美野里町（現小美玉市）にある茨城県立中央高校へ進学しました。楽しいこともたくさんあったけれど、そこでできた大切な友人を事故で亡くしてしまって…。心にぽっかりと穴が空いていたのか、この頃の記憶があまりないんです。

卒業後の進路は保育士の資格が取れる短大を目指しました。某短大のAO入試では、面接官との考え方の違いがあり、若気の至りからか「私はここを受けません！」と会場を出てきてしまうこともありました。「間違っている」と誰に対してもハッキリものを言う性格なのは、昔から変わらないところで…。

進学した茨城女子短期大学では、はじめはなかなか心を開けずにいたのですが、すごく気の合う友人に出会えました。性格も好みの服も趣味も全然違うのにお互いストレートにものが言えて、付かず離れずの程よい距離感を保てるんです。大学時代に知り合った親友たちには今でもいろいろと助けられています。またこの頃、私の世界が広がるきっかけがあり、これまで知り合うことのなかった人の話を聞いていくうちに、政治や経済、地域のことに興味を持って、自分なりに勉強もしたことで、世の中の仕組みなどを垣間見ることができました。いろいろと吸収することができたのは、どんな環境に置かれても常にアンテナを張って全力で取り組んできましたし、苦手なところや足りない部分は、他のなにかで埋め合わせるよう努力をしてきたからだと思います。

永遠の課題を追い求める

幼稚園教諭免許も無事取得し、短大卒業後に幼稚園に就職。初任地の茨城町内の幼稚園では何十年振りの新卒採用で、珍しい存在だったと思います。一年目でいきなり年長組を任され、右も左も分からない中、本当にハードな毎日でしたが、職場の先輩に一つ一つ細かく指導していただいたこと、今でも感謝しています。

幼稚園の先生になりたての私が担任で、お母さんたちも不安だったと思うのですが、その年の最後に手作りの卒園記念アルバムをプレゼントしてくれて、とても嬉しかったんです。今でも落ち込んだ時に私に力を与えてくれる大切な宝物です。

その後、私立の保育園に転職しましたが、教育的な幼稚園とは打って変わって、保育園は養護的な内容が多く関わる時間も長いので、前職とのギャップにとても戸惑いました。自分なりに預かっている子供を一番にと考え保育をしてきましたが、これで良いのかな？と、なんとなく心に引っかかっていました。〝保育〟は野放しでもいけないし、大人の価値観を押し付けてもいけない。どこまで関わるべきなのか。子育てに正解がないように、保育も永遠の課題なんです。

子供たちの代弁者として

保育園に三年勤めた後、長男が生まれましたが、先天性疾患が見つかりました。手術をするために小児病棟に入院すると、命に関わる病と戦う子供たちを目の当たりにしたんです。「嘘でしょ…」と目を覆いたくなる現場。健康なことが当たり前なのではないと思い知らされました。この経験から、もっとたくさん知識を身につけなければいけないと感じ、職場復帰するまでに救急法講習を受け、病児保育、法律の勉強などにも取り組み、視野を広く意識を高く持とうと努力しました。一度やりだすと夢中になる性格なので一生懸命勉強しました。

現在勤めている国立病院機構水戸医療センターの院内保育園は、ドクターや看護師の子供たちを預かる、一般の保育園とはちょっと違った環境。少人数クラスなので、一人一人とより密に関わることができています。

保育園や幼稚園に通っている子供たちは元気ですが、自分の不調や思いなどを、まだ言葉でしっかりと伝えることができません。そんな子供たちのちょっとした変化を見逃さず、言葉にならない声をなんとか聞いてあげたい、と思いました。そして、必要に応じて保護者に伝えたり、しかるべき対応をとれるような〝子供たちの代弁者〟でありたいと。この立ち位置だけはずっと貫き通していきたい、と考えています。

保育や保育士の在り方を考えると、私はまだなにも成し遂げられていない…という歯がゆさやもどかしさがあります。私自身も子供の母親です。子供の大事な時期に寄り添ったり、きちんと向き合わずに外ばかり向いているのは違うかもしれない、と感じています。どちらをとるのかという話ではないですし、自分の将来像もまだはっきりとはしていないのですが「このままではいけないな」ということだけは感じています。

なにもないから、みんなで創り上げたい

茨城町のことは大好きです。以前主人の仕事の都合で二週間ぐらい東京へ行き来しただけで、都会にはすごく息苦しさを感じてしまって。私の家の近所はお店などなにもないのですが、車さえあれば特に不便はありません。いい意味でなにもないから好きなんです。近所同士で当たり前のように声を掛け合い助けたり。人と人との距離が近いんです。近所の森は、例えるならトトロの森みたいで、夜は街灯が少ないので星の数も多いし、静かな雰囲気に包まれているんです。涸沼川の橋を渡ると、「帰ってきた！」とすごく落ち着くんです。子供たちも自然を自分の体で直に感じて、のびのび大きくなっていけばいいと思いますし、純粋な気持ちでいろいろなことを知ってもらいたいんです。

小さい頃、近くに遊べる公園が無かったので、いつか自分で作ろうと思っていました。子供ができた後、自宅敷地内の雑木林を開拓して、土をならし、芝を張って遊具を置いて、公園を作りました（笑）。元々アウトドアが好きな家庭だったし、友人は建築・建設のプロも多い。みんなでできることを出し合って形にしました。持つべきものは人とのつながりだなと改めて思いました。お手伝いしている、いば3ふるさとサポーターズクラブの活動もそう。この町で楽しいことが創れたらな、と思っていたら、いば3でそれが叶っちゃったんです。春のお花見や秋の涸沼でのオフ会、現在製作が進められている町のプロモーションビデオ撮影にも関わらせてもらって、すごく楽しいです。これからも、仕事も遊びも、常に全力でやっていこうと思います。

縁をつないでいくために

To connect to fate

まちを想う人

有限会社サンファーム 代表取締役 川島直人

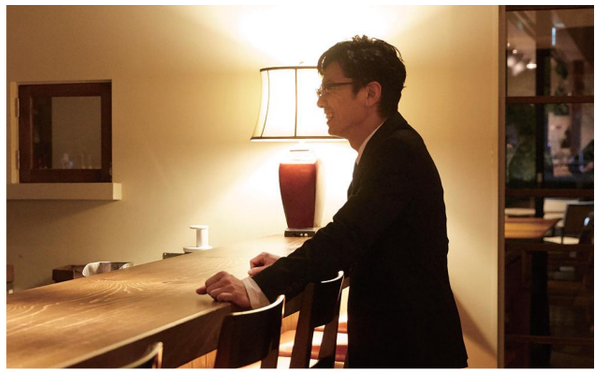
川島さんは一九七四年茨城町下土師（しもはじ）生まれ。幼少の頃に「いばらき少年剣友会」に入門したのを機に高校卒業まで剣道一筋の道を歩み、全国大会でも活躍。大学時代から都内有名店で飲食業界のノウハウを学び、二〇〇二年帰郷。両親が営む飲食店「アメリカ屋」を継ぎ、二〇一四年に二店舗目となるCOLK［コルク］をオープン。地域の飲食業界に一石を投じる存在として注目されています。

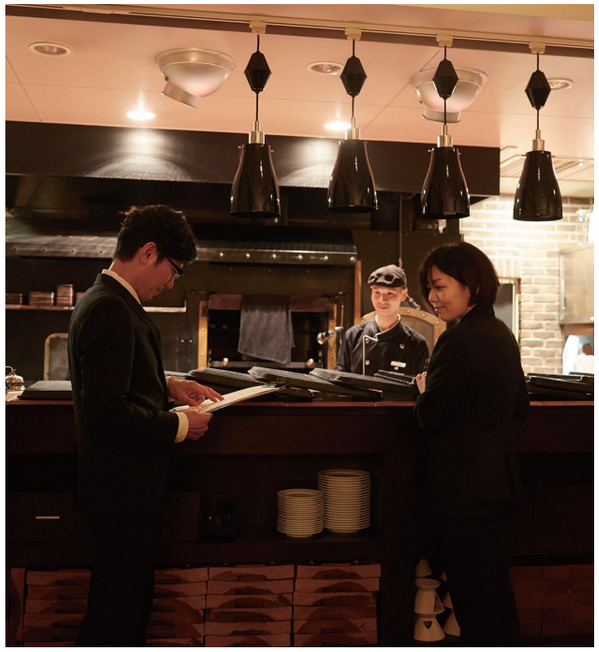
竹刀をトレイに持ち替えて

ひたすら剣道に明け暮れていた子供でした。兄が道場へ先に通っていたので、自分も後を追うように通い始め、幼稚園の頃からほぼ毎日稽古。当時友達と遊んだ記憶がほとんどなく、夏は防具が暑く、冬は寒くても素足。本当は剣道が大嫌いでしたが、「一度始めたのであれば、やり続けなさい」という父の言葉に逆らえず、辞めることはできませんでした。その後、中学二年の時、所属する剣道部の団体戦で全国ベスト十六まで残れたんです。今思うとその経験が私の中で確固たる自信となったのかもしれません。〝何事も十年以上続ければ、ある程度のところまでいける〟。人生の糧となった経験は、図らずも剣道だったのです。

剣道で進学した高校は寮生活。早々に茨城町から離れることになりました。しかし思うような結果が出ず、剣道以外の世界を知りたいと思い大学進学を機に竹刀を置きました。ところが、いざ十五年近く続けたことを辞めると、なんだか自分が空っぽになった気がして…。年頃の学生なので友達と朝まで飲んだり女の子とおしゃれなカフェやバーに行ってみたりと、いろいろと遊んでいました（笑）。しかし、このままではいけないな、と思っていたところもあって、気になっていたカフェでアルバイトを始めたんです。そこがグローバルダイニングという会社が経営するお店でした。社内は完全実力主義。売上が上がらない店長は即降格、時給は自己申告制、グループ店舗同士の争いも熾烈（しれつ）極まりないところで。でもこの社風が肌にあったのか、むしろ頑張ろうと思えたんです。店長や社員の方からの厳しい指導も体育会系の指導を受けていたからか、割と平気でした。お客様から「おいしい！ありがとう」と目の前で喜ばれることも嬉しく、大学卒業後はそのまま同社へ就職し、カフェの店長になりました。その後、元スタッフがオープンしたお店に移り、バーテン・キッチン・サービス・マネジメントと飲食業のノウハウを学ぶ日々。その最中、家業である「アメリカ屋」の経営を亡き父に代わり引き継いだ母が体調を崩し、先に地元に戻っていた兄と二人で共同経営する形に。後に自分の夢を諦めきれなかった兄を快く送り出し、三十代前半で、私一人でアメリカ屋の舵を切ることになりました。

小さい頃から父のお店にはよく行っていました。お店で働くウェイトレスさんやコックさんには、かわいがってもらったのを今でも覚えています。父は三十年前〝森に囲まれたログハウスでステーキとハンバーグが食べられるお店を〟と現在の場所にアメリカ屋を開きます。当時お店の周りは深い森。通りからも目立たずこんな所にお店を出すのはやめた方がいいと周囲は猛反対。しかし父は考えを曲げなかったそうです。





縁をつなぎ、本質を忘れず

接客に際し、徹底した社員教育の会社で働いていたので、早々にホスピタリティの甘さが目につきました。「人を元気にするレストラン」が弊社のコンセプト。それには自分が元気でなければなりません。厨房の中も含め全員、大きな声でお客様をお迎えするというサービスの基盤づくりを徹底しました。店内で強いチームが築き上げられると、それに呼応するように客足もだんだんと伸びていきました。

二店舗目であるCOLKを開こうと決めた時、今大型のレストランを開店させるなど無謀すぎる、と父の時と同じように周囲から猛反対されました。しかし、もし自分が父と同じ歳で亡くなる、と考えたら時間的猶予も無く、なにより〝地域にこれまでにない上質な料理とホスピタリティを提供したい〟という想いを曲げることはできなかったんです。話が進むにつれ、両親の縁はもちろん新たに自分で築いた縁が少しずつ動き出し、トントン拍子でことが進んだのです。背負うものの大きさに悩むこともありましたが、なにより心強かったのが、父の代からアメリカ屋を支えてくれているスタッフの存在。料理長はアメリカ屋以前から父と一緒に飲食店をやってきた方。父が最後に面接したホールスタッフは父の写真を財布に忍ばせるような方で。完成した店舗を見るなり「オーナーに見せてあげたかった…」と突然泣き出したんです。その姿を見て、改めて親の偉大さを知り、その想いをつなげ支えてくれた方々がいたから今があるのだと実感したんです。父から受け継ぐ本質的な部分を忘れずにいれば、この先につながっていく。そう信じているのです。

初心にかえり、その先へ

息子にスポーツをさせようと、いろいろと見せたり体験をさせましたが、選んだのがなんと剣道で。同じ血なのか、何で!?と驚きました。再び竹刀を握り、素振りを教えたり。私と同じ道場に息子を通わせることになったので、また茨城町と接点がある生活になりました。道場では自分の恩師が未だ現役。顔を合わせるとピシッと背筋が伸びます。

今は町外に住んでいますが、茨城町は私の原点だと思います。町内にある両親の墓参りをすると、初心に戻ります。電線が少なくて空が広く、果てしない田園風景に落ち着きます。池の中に神社がたたずむ神秘的な場所や、実家近くの路地、あのままの空気感でずっと変わらないでいて欲しい、そんな場所です。

茨城町にはたくさんの農家さんがいらっしゃいます。気になった方には直接お会いして野菜を仕入れさせていただき、作り手の想いとおいしさを合わせ、お客様に伝える役割ができたら、と思います。店の個性を出すのではなく、あくまでこの土地にしかないもの、季節の移ろいを感じられる素材そのものの魅力にゆだねたい、と考えます。そして、その体験を思い出として持ち帰っていただき、いつまでも記憶に残る店にしたい。飲食店が町に貢献できることは大きいと思います。地域の皆さんに活力を与える力がレストランにはある。その力を町と分かち合うことができれば、と思っています。

アメリカ屋　america-ya.jp
COLK　america-ya.jp/colk

祭ばやしが聞こえる

お祭りと絆 地域のつながり

写真｜アラタケンジ　文｜ホシカワリエコ

昭和の終わりぐらいまでは賑わいのあった小鶴商店街。近年では人通りも少なくなり、静かな通りの様子を見せています。その静かな通りが、一年に一度、活気に満ちて賑やかになる日があります。毎年七月に行われる小鶴八坂神社の祇園祭です。

通りが人で溢れかえる日

お祭り初日の夕方、神様をお神輿に移して御仮屋へと移動する宮出しが行われる宵祇園、そして翌日の本祇園では小鶴地区内で渡御が行われ、夜十時に宮入りし終了します。この本祇園では、夕方から小鶴の旧道が歩行者天国になり、道の両側にはたくさんの露天商が連なります。どこからともなく人が集まりはじめ、あっという間に通りは人で埋め尽くされ、普段は見ることのできない光景を目の当たりにすることに…。

子供も大人もみんな笑顔に

小鶴区長の大月さんにお話しを伺うと「小鶴のお祭りになるとなぜだかわからないけど、家族全員が集まるんです。普段は全員集まるということはまずないのだけれど、この時ばかりはね。みんな小鶴のお祭りを楽しみにしているんです」と教えてくれました。

商店街の古い建物とお祭りの情感が相まって、ノスタルジックな雰囲気も感じられる小鶴のお祭り。太鼓や笛などのお囃子に合わせ、山車の上でひょっとこ、おかめ、狐が舞い、子供たちの担ぐ小さなサイズのお神輿から大人が担ぐ迫力あるお神輿など、参加者はもちろん見物客たちも、子供から大人、年配の方までみんな笑顔がはじけます。

通りにはかわいらしい浴衣姿の子供を連れた家族、思い思いにおしゃれをして友達とはしゃぐ中高生、進学や就職で家を離れ、久しぶりに帰ってきて話し込む同級生、意気揚々と半纏姿できめた担ぎ手たち…。一年に一度、待ちに待ったお祭りで高揚している様子が表情や会話から伝わってきます。

伝統と変わっていくもの

小鶴の祇園祭の起源は明確な記録がないのではっきりとはわかりませんが、平成二十六年の調査で、祇園祭に関する書類箱の中に「明治二十七年八坂神社祭礼諸入費帳（お祭りに関する記録）」が発見され、現在までの記録が残されていることから、約百二十年ほど継続して行われているのではないか、と考えられています。

華やかなお祭りの舞台裏では、運営についての課題もあります。副区長の安村さんはお祭りの今後の存続について憂慮しています。「昔みたいに、神社があってそれを信仰していた人がいて、皆で仲良くできたという時代ではなくなってきています。今では少なくなってしまった氏子をはじめ、地域の人たちとともに歴史あるお祭りをこれからも続けていくためにしっかり考えなければいけない状態にあるんです」と。

お祭りの意味とは

お祭りは神事として行われていたものであり、それが今日まで継承されてきたのだろうと思いますが、長い時間を経る間に本来とは違った意味や役割も持つようになってきたのではないでしょうか。無意識のうちに家族の絆やつながり、地域との結びつきを深める機会をもたらすなど、人々に故郷を思う気持ちを醸成し、コミュニケーションのきっかけをつくっている…。

これからも歴史ある小鶴のお祭りを継承し続け、小鶴に響き渡るお囃子やお神輿を担ぐ掛け声を途絶えることがないよう、地域の皆さんで守り続けていってほしいと思います。

15,16ページで紹介した小鶴のお祭り。
お祭りの歴史や雰囲気、お祭りを行う意味など
取材をさせていただきました。
小鶴のお祭りにここまで人が来るのかとおどろきました。
お神輿や山車の様子など
紙面では掲載しきれなかった写真を
後日WEBサイトにて公開いたします。
お楽しみに!

From Sun –編集室から–

Sun 第5号をお届けします。
新しく編集室に加わり、Sunを創っていくことになりました。よろしくお願いいたします! 今号は「ゆだねる」というテーマの元、取材を進めました。馬やバスなど形あるものに身をゆだねること、お祭りの雰囲気など形ないものに身をゆだねること、さまざまな形があると思います。日々暮らす中で、ふと気がつくとなにかに身をゆだねていた…そんなことに意識向けてみると、心が豊かになれるかもしれませんね。[ひで③]／暑さに人一倍弱いため、少し外に出るだけですぐ汗だくに…。いつもクーラーがある部屋に身をゆだねています。この時期、一番頼りになる相棒です。[がっきー3]／馬の賢くて従順なところや、優しい目と引き締まったスタイルが好きで、小さい頃から大好きな動物でした。でも、私にはあまり触れる機会のなかった憧れの存在。いつか手綱を持って、気持ち良くフィールドを駆け抜けることができたらな…と思っています。[243]／お祭りといえば煮イカですが、茨城のご当地グルメだったことを知っていますか？さすがご当地グルメって感じで人気があり、うちの家族もそれが大好物。お祭りではいつも買ってしまいます(笑)。[ふぁんとむ3改めふぁんとむ4]／先ず、先日の動画撮影にご参加いただいた方々、ありがとうございました。公開はまだ先ですが、首を5mくらい伸ばして待っていてください(笑)。話変わって今回のSun、小さい頃から前を通るたびに謎だった中島牧場に取材で中に入ることができ、こんな素敵な場所だったのかと感動しました。会員数も600人を超えたいば3、これからもゆるくつながりを大きくしていければな、と思います。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　www.town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2018年12月発行予定です。

Sun 第5号 夏号　2018年8月10日発行
企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL：029-240-7126
MAIL：iba3@town.ibaraki.lg.jp
編集・アートディレクション・デザイン｜i,D
取材・出筆｜米村 優子　ホシカワリエコ　石川 聖太
写　真｜アラタケンジ
イラスト｜Kenbee67
印刷・製本｜株式会社光和印刷

本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all lights reserved.

Special Thanks［順不同］
松浦陽菜さん　株式会社中島トニアシュタール　関東鉄道株式会社 水戸営業所
独立行政法人国立病院機構 水戸医療センター つくし保育園
株式会社 明日香　有限会社サンファーム

“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は、
いばらきまちが考えるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場です。
まちとのつながりをみんなで共有し、
魅力・風景・楽しみ方を見つける活動
をします。ご入会された方には、素敵な
サポーターズグッズセットをプレゼント。
ぜひご入会ください。

お申し込みはこちらから
www.town.ibaraki.lg.jp/iba3

連載
マチのケシキ
第5回　大きな平屋とご先祖様
イラスト｜Kenbee67　文｜石川聖太

親族が一堂に会する時に撮る写真には
実際には何世代も前のご先祖様たちもたくさん写っていて
それぞれの格好や思い思いの表情をして
子孫たちを温かく見守っているのかもしれませんね

八月も半ばを迎え、強い陽射しの中、アスファルトに陽炎がゆらめき、油蝉の鳴き声が響きます。まさに夏のど真ん中を感じる頃、お盆がやってきます。

お盆は、先祖が生きている者の生活に影響を与えているという「祖先信仰」の一つで、旧暦の七月十五日に先祖の魂を家にお迎えします。それとともに、地元を離れて暮らす子供たちやその家族、孫たちが実家に帰ってくる機会にもなっていました。現在では核家族化が進みましたが、それでもこの時期に町内を歩くと、広い庭にたくさんの車が並び、盆提灯が下がった玄関の奥に、大勢の親族が集まっている大きな平屋を見ることができます。

学生時代のある夏の夜、ふと疑問が湧き「先祖をお迎えする」とは言うけれど、具体的にどのくらい前の先祖が帰ってくるのだろうか?と考えたことがありました。実家の床の間に飾られている写真の人たち、祖父母はもちろん、曾祖父母、高祖父母、それより前のご先祖様…となると、家の中が先祖の霊だらけじゃないか!と急に怖くなったのを思い出します。一般的には高祖父母より上は「先祖」という呼び名になるそうですが、もしご先祖の方々が一斉に実家に帰ってくるとなると、そりゃあ大きい家じゃないといけないよなぁ、と思ったのでありました。

Sun 第五号 二〇一八年八月十日発行 企画・発行 いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局 iba3@town.ibaraki.lg.jp TEL 029-240-7126

Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です